

R. H. ブライズの俳句観：一茶と子規

R.H. Blyth's View on Haiku: Issa and Shiki

氏家飄乎・上田邦義 訳

Translated into Japanese by
UJIE Hyouko and UEDA Kuniyoshi¹

Abstract: KOBAYASHI Issa is the third among the four great Haiku poets Blyth dealt with. He says Issa is the poet of destiny and has something of Shakespearean quality. He asserts that Issa is like Heine, in that he has the power of saying lightly and humorously what others have only been able to say in the grand manner. Blyth emphasizes that Issa, like Basho, imitates no one, and that their lives are their own. Blyth's criticism of Issa leaves something to be desired. His remarks, however, are worth noticing. Blyth's comments on the fourth MASAOKA Shiki: Shiki rather depreciated Basho and affirmed the superiority of Buson. When we read his haiku, Blyth says, we are struck with a large number of excellent, perfect haiku which he wrote. Shiki was a great believer in nature. He is not in touch with much that is human. Shiki takes haiku back to Buson; he sees things under the aspect of beauty. Then Blyth concludes that Shiki affirms in theory and practice that we must follow nature, in its outward manifestations.

Key words: Blyth, Haiku, Basho, Issa, Heine, Shakespeare, Shiki, Buson, nature
ブライズ、俳句、芭蕉、一茶、ハイネ、シェイクスピア、子規、蕪村、自然

一 茶

小林一茶(1763-1827)は、芭蕉が生活の詩人であり、蕪村が仕事場の詩人であったように、運命の詩人である。芭蕉は心優しく、あわれみ深かったが、どこか観念した神聖なところがあった。また蕪村は一傍観者として世界を見た。これに対して、一茶は運命の動きのままに動かされる。人生は楽しく苦しく、喜びあり悲しみがある。一茶はそれらと共に歩むのである。彼は人生を褒めたり腐したりはせず、存在するどんなものからも身を引くことはしない。それだ

けではない。一茶にはシェイクスピア的性質がある。すなわち、物事に対してどうあるべきかを命じたりはしない。宇宙はいかに運行されるべきかについて神自身以上には知らない。また、人生の宿命的な出来事や、未知の目的地への経路に、逆らったりはしないのだ。これらは一茶

しちばんにつき
の『七番日記』(小林一茶の遺稿集。散文)の二月十二日の項の、次の一節を見ればわかる。

布施東海寺に詣でけるに、鶏どもの跡したひぬることの不便さに、
門前の家によりて、米一合ばかり買ひて、藁たんぼぼのほりにち
らしけるをやがて仲間喧嘩をいくところにも初めたり。其のうち梢
より鳩すずめばらばら飛び来りて、こころしづかにくらひつつ、鶏
来る時小ばやくもとの梢へ逃げ去りぬ。鳩雀は蹴合の長かれかしと
や思ふらん、士農工商その外さまさまのなりはひ皆かくの通り。

米蒔くも罪ぞよ鶏は蹴合ふぞよ

Kome maku mo tsumi zoyo tori wa keriau zoyo

ふせ とうかいじ
私は布施の東海寺に詣でた。自分のあとを慕ってついてくる鶏どもを気の毒に思
い、寺の門前の家から米を若干買い、それを藁やたんぼぼの中に撒いた。そのうちあ
ちこちで鶏どもは仲間喧嘩をはじめた。その間、鳩や雀たちが枝々から飛び降りてき
て、しづかに米を食べていた。やがて鶏どもが戻ってくると、鳩たちはぱっと枝へ飛
び去った。鶏どもの蹴り合い喧嘩がもっと長く続いてくれたらよかったと願っている
かのごとくに。士農工商、その他あらゆる人間たちの暮らしも、みなこんな風なもの
である。

Scattering rice,--

This also is a sin,

The fowls kicking one another!

(米を蒔くのも罪なことであるよ。鶏どもがそれで蹴り合いをすることになるのだ)

一茶の全生涯は悲劇であった。何事にも失敗や不幸を招く輩のひとりであった。一方には何をやっても成功する人々がいるというのに。キリストは自分自身の性格ゆえに非業の死を運命づけられていたし、一茶は貧困と苦しみを運命づけられていた。しかし、共に、遠い先の結果は、予期されたかもしれないものとは大いに異なるものであった。この二人の間にはもう一つ

類似点がある。キリストは人間はどうあるべきかというわれわれの理想であるが、その愛と憎しみはきわめてユダヤ的であって、その特殊が一般への高まりを見せたのだ。一方、一茶もまたすべての俳人の中で、またはすべての日本の詩人の中で、最も日本的でありながら、それにも拘わらず、またはそれゆえにか、彼の作品は普遍的な訴えをもつという点である。この逆説は、恐らく最も偉大なすべての人間についていえることであろう。

一茶はいくらか歪んだ人生観をもっていたとしばしばいわれる。この誤った考えは、われわれほとんどの人間とは違って、一茶は自分の考えを口に出して言ったのだ、ということが分かっていることからくるものである。彼は真実を話したというだけでなく、すべての真実を語ったのだ。かの有名な十五世紀の禅の奇人一休（1394-1481、室町時代の僧。当時の墮落した禅宗を鋭く諷刺した）は、同じ原因で傷ついている。性的問題でさえも、彼はどんな人に対しても、全く隠し立てがなく、それで彼の評判はそれ相応にわるくなったのである。一茶は芭蕉同様極めて道徳的な人間だったが、多分さほど「堅苦しい」人間ではなかった。芭蕉は生まれも教育も侍のそれであったが、一茶はもっと広い人生観、どんな規則にも金言にもあてはまらない人生観を持っていた。次の一節は彼の世界観とその判断の「基準」を示すものである。

風流をたのしむ花園ならで後の畑前の田の物作りに志し、自ら鋤
を採って耕し、先祖の賜と親の命に懇を尽し、吉野の桜、更級の月
よりもおのが業こそ楽しけれ。朝夕心をとどめて打むか小菜種の花
は井出の山吹よりも好もしく、麦の穂の色は、牡丹芍薬より腹ごた
へありと覚ゆ。

花園は確かに趣ある楽しみであるが、裏の畑や、前の稲田の米作りに、自分で鋤を手にとって実際に仕事をして、両親の命と祖先から受け継いでいるものに心を尽す方が、吉野の桜や更級の月よりもずっと楽しい。また朝夕心をとめて打つ小菜種は、その花などは井出の山吹なんかよりもはるかに気に入っているし、大麦の緑の穂は牡丹芍薬よりも真に見ごたえがある。

換言すれば、人生は芸術より重要である。われわれの芸術と詩は生活の中に取り入れられるべきである。美は日常生活の中に見出されるべきものであって、そのとき美は自然に期せずして創り出される。

一茶はハイネ（Heinrich Heine, 1797-1856, ドイツの詩人・批評家）に似ていて、他の人たちは堅苦しい表現でしか言い表せなかったことを、軽く、楽しく言っている能力がある。聖パウロ（Saint Paul, -67?, 初期キリスト教伝道者）の言は次のようである。

実に、被造物全体が、今に至るまで、共に呻き、共に産みの苦しみを続けながら、神の子たちの出現を待ち望んでいる。（「ローマ人への手紙」8章19・22）

一茶にかかれば、こうも違うのだ。

蚤どもも夜永だろぞ淋しかろ

Nomi-domo mo yonaga darou zo sabishi karo

For you fleas too,

The night must be long,

It must be lonely.

（お前たち蚤にとっても、夜はさぞ長いことだろう。さびしいことだろうよ）

子 規

子規（1869-1902）は、その当時の支配的傾向に反対して、芭蕉を幾分低く評価し、蕪村の優秀性を主張した。蕪村の中で彼に訴えたものはその客観性、変化に富む世界を明晰で新鮮な眼で見る画家的詩人としての態度であった。ここで客観・主観について論じるつもりはないが、このことは言い得るであろう。すなわち、芭蕉と一茶はその最善の状態にあつては、事物が俳人の詩的生活とまじり合い、歪みや変色を蒙ることなく、むしろそのもの自身の内面的性質をまざまざとあらわす、客観的主観があるということである。

よの中は稲かる頃か草の庵 芭蕉

Yō no naka wa ine karu koro ka kusa no io

My thatched hut;

In the world outside

It is harvest time?

（わたしはこうしてひとり藁葺きの庵に住んでいる。

外の世界はいまは稲の刈入れの時期であるようだ）

子規と蕪村の場合、その客観性にはどこ冷静で、楽しいものがある。われわれはその前で落ち着いていられる。というのは、それはわれわれに何の要求もして来ないからだ。芭蕉や一茶

がしくじると、われわれは感傷性、もしくはさらに悪い心境に陥ってしまう。蕪村や子規がしくじると、風景は厚紙でできたものとなり、事物は生命も深みもない二次元の世界のものとなる。

子規の人間性は恐らくさほど魅力的なものではないであろうが、しかし、その句を読むとき、われわれは彼の書いた数多くのすぐれた、完璧な句に心打たれるのだ。子規が心から信奉したものは、自然であり、「静物」であり、また句中のあらゆる知的要素を回避することであった。彼の強さと弱さはその無宗教にあった。このことは、病床にあるとき、叔父に送られた手紙の中で明らかにされている。

我等亡くなり候とも葬式の広告など無用に候。家も町も狭き故二三十人もつめかけ候はば、柩の動きもとれまじく候。何派の葬式をなすとも、柩の前に弔詞、伝記の類読み上げ候事無用に候。戒名といふものを用ひ候事無用に候。・・・。自然石の石碑もいやなことに候。柩の前に通夜すること無用に候。通夜するとも代りあひて可致候。柩の前にて空涙は無用に候。談笑平生の如くあるべく候。

When I die, it is needless to advertise the funeral etc.

The house is small and the street narrow, and if twenty or thirty people crowd in, the coffin won't be able to move.

Whatever sect the funeral service may be held by, funeral speeches and reading accounts of my life are unnecessary.

A posthumous Buddhist name I don't want— nor a tombstone made of a natural stone. It is not necessary to hold a wake before the coffin. If a wake is held, do it in turns.

No crocodile tears, please; do it in the ordinary way.

無宗教であることから、子規には眼と心の清澄さ、感傷の無さ、真実への愛、文学への献身的熱愛などが生れたのだ。しかしわれわれは何か深みのなさを感じる。つまり、赤子は湯浴みの湯と共に投げ出されているのだ。形式というものは確かに迷信的で非合理的なものであるにせよ、彼は人間的なものにはさほど触れてはいないということだ。ホイットマン (Walt Whitman, 1819-92、アメリカの詩人。『Leaves of Grass』『草の葉』の著者) の言うように、

すべての人に立証されることのみがそうであり、
誰ひとり否定する者がいないことのみがそうである。

子規はヒューマニストであるが、われわれは何か堅苦しい、皮相的な、愛のない冷たいものを感じるのだ。

芭蕉は俳句の基礎を固めた。蕪村はその領域を広げた。一茶はそれを芸術以上の、詩以上の、あらゆる美的価値以上の、人生という領域へ高めた。この意味においても、一茶はまさに日本を代表する詩人(the Japanese poet)である。大地に最も密着した時に最も天国に近いという点で。

さて、子規は極めて現実的であるが、俳句を蕪村へと引き戻した。子規は芸術家として、美の様相のもとに事物を見るのである。芭蕉の控えとも見なされ得る其角の一句を含む四人の俳人の次の句で、四俳人を比較することもできよう。

一家に遊女も寝たり萩と月
芭蕉
Hitotsu-ya ni yujo mo netari hagi to tsuki

Lodging in one inn,
Together with courtesans;
Lespedeza flowers and the moon. Basho

(隠遁者の自分が、たまたま一つ家に遊女と同宿したことだ。庭には萩が咲き、空には月が輝いている)

傾廊 (傾城のいる廓の廊下)
時鳥あかつき傘を買はせけり
其角
Hototogisu akatsuki kasa wo kawase keru

A Courtesan Enclosure.

A hototogisu sings;
In the dawn,
I am made to buy an umbrella. Kikaku

(時鳥が鳴きだした。廓から帰ろうという明け方である。にわか雨が降り出して、傘を買う羽目になってしまった)

わかたけや橋本の遊女ありやなし
蕪村
Wakatake ya hashimoto no yujo ariya nashi

Young bamboos;

Courtezans of Hashimoto,

Not there still?

Buson

(若竹の林。あの全盛時代の橋本の遊女たちはまだそこにいるの
だろうか。それとももういないのであろうか)

凧や二十四文の遊女小屋 一 茶

Kogarashi ya niju-shi-mon no yujo goya

The autumn storm;

A prostitute shack,

At 24 cents a time.

Issa

(木枯しが吹き荒れている。みすぼらしい遊女小屋がそこに
ある。一回遊ぶのに二十四文ということだ)

船着きの小さき廓や綿の花 子 規

Funatsuki no chisaki kuruwa ya wata no hana

Near the boat-landing;

A small licensed enclosure;

Cotton-plant flowers.

Shiki

(船着場のある近くに、小さな公認の廓がある。そのあたりに
綿の花がいまを盛りと咲いていることよ)

芭蕉の句は、市振という関所の町で偶然同宿した不運な人々に感じた同情を直接はあらわしていない。その人たちは伊勢大神宮に参詣する途上にあつた。彼女等を萩の花に、また自身と俳句道を月にたとえることにより、芭蕉はその両者を讃え、それらをこの世の世界から句の世界へと高めている。

其角はその主題を平然と取り扱う。朝吉原を出ようとすると、にわか雨で、囲いの外（か恐らくは中）で、傘を買うことになる。この時、時鳥が鳴きだしたというのだ。其角は宗教心とか、真の禅の理解などのない詩人である。

蕪村は絵画に没頭し、はるか彼方の歴史的過去の連想に引き戻されている。すなわち遊女は橋本の繁栄した全盛期の象徴である。その女性たちは、昔同然ゆたかに生い茂った若竹の傍らで、仕事に精を出しながら、まだそこにいるのではないか。彼にははるか昔のさまざまなことが、全く過ぎ去っていないかのように思われるのだ。

これらとは対照的に、一茶はある生活風景を与えてくれる。その中で、唯一の芸術的要素は、その素材の選択なのだ。無用で、無意味な、自然のままの、気紛れな、秋風が吹いている。みすばらしい、薄っぺらな建物。きつい目つきの、柔らかな顔の女たち。彼女たちが日々の糧を得る仕事の金額までも。そうした一切がなんの説明も加えられず、われわれの前に置かれる。一茶はこうして、どんなに綿密な芸術も伝えられないほどの意味を伝えるのだ。

子規は蕪村に戻る。自分たちを芭蕉につらなる者と考えた、弱弱しく鈍感な、彼の時代の俳人たちへの反動として、子規は、理論と実践の両面において、われわれは外面に表われた自然に従わねばならぬと主張する。それゆえ、この子規の句は、小さな船着場、名状し難いが紛れもない雰囲気の郭、綿畑の白い花を示している。これは生活の一風景ではあるが、そこには果たして生命とか深みといったものがあるであろうか。

ⁱ R.H. Blyth, "Issa", "Shiki", *HAIKU Vol. 1 Eastern Culture*, Hokuseido, 1949